

[三人の密偵]

観劇の参考に資料をご用意いたしました。

観劇前にお読みになっても

作品を楽しんでいただくのに問題はございません。

ただ、一部作品の内容と関わっている部分もございます。

全く前情報なしでご覧になりたいお客様にはお勧めできません。

ご了承ください。

◆ 参考文献 ◆

◆ 年表 ◆

◆ 語句説明 ◆

参考文献

[三人の密偵]の構想・執筆にあたり以下の書籍を参考にしました。
各作者・著作権保持者に心より感謝の意を表します。

『張作霖 爆殺への軌跡一八七五～一九二八』	杉山祐之
『張作霖爆殺 昭和天皇の統帥』	大江志乃夫
『「張作霖を殺した男」の実像』	桑田富三子
『馬賊の「満洲」 張作霖と近代中国』	澁谷由里
『関東軍 在満陸軍の独走』	島田俊彦
『関東軍—満洲支配への独走と崩壊』	及川琢英
『昭和史 1926-1945』	半藤一利
『謎解き「張作霖爆殺事件」』	加藤康男

※順不同・敬称略

関連年表

1840年～1842年

アヘン戦争勃発。イギリスによってもたらされたアヘン(麻薬)が清国内で蔓延。経済的にも大混乱が起き、清国は全面禁輸に踏み切る。これに反発したイギリスと清国で戦争が勃発。イギリスが勝ち、この敗戦以降、欧米列強の清国への進出が活発化する。

1868年（明治元年）

明治維新開始。日本、近代国家へと変貌。

1871年（明治4年）

日清修好条規締結。両国初の対等な近代条約。

1894年（明治27年）

日清戦争勃発。朝鮮半島への影響力を争い日清間の関係が悪化。戦争に至る。

1895年（明治28年）

日清戦争、日本の勝利で終結。下関条約締結。朝鮮への影響力だけでなく、日本は清国から、満州の遼東半島を割譲される。これにロシア・ドイツ・フランスが干渉。結果、日本は遼東半島を手離す(三国干渉)

1898年（明治31年）

清国民衆の外国人宣教師への殺害を口実に、ヨーロッパ列強の中国分割が行われ、ロシアは遼東半島先端部である旅順・大連の租借権を得る。ロシア帝国はこの頃より、広く満州への進出を果たす。日本はロシアの満州進出に強い危機感を持つ。

1900年（明治33年）

義和団事件勃発。列強の中国分割に激怒した清国民衆が、義和団を中心に過激な外国人排斥運動を起こす。列強はこれを口実に軍事的に介入。日米英仏露独等の連合軍が北京を占領する。結果的に列強の中国分割は更に激しくなる。

1904年（明治37年）

日露戦争勃発。満州と朝鮮半島をめぐる日ロの緊張は戦争にまで発展。満州を主戦場とする戦争が勃発。日本、列強の一国であるロシアに善戦。。

1905年（明治38年）

日露戦争終結。日本にやや有利なポーツマス条約が調印される。これにより日本はロシアから、南満州の鉄道、付属地、鉄道周辺の炭鉱の租借権を譲られる。また、遼東半島先端部(関東州・関東軍の語源)の租借権も譲渡される。これにより日本は列強に先駆けて満州に権益を確保することになる。

1910年（明治43年）

日韓併合。大日本帝国、朝鮮半島を併合する。朝鮮半島が日本の直轄地となったことで、それに隣接する満州の軍事的な重要度が増すことになる。

1911年（明治44年）～1912年（大正元年）

辛亥革命勃発。清国打倒を叫ぶ勢力が各地で立ち上がり、孫文を中心として革命政権が誕生する。翌年清国は滅亡、孫文は清国の総理大臣であった袁世凱に国家元首を譲り、袁世凱が新しく成立した中華民国の国家元首となる。

1914年（大正3年）

第一次世界大戦勃発。世界初の総力戦を戦う欧米列強が、一時的に中国への関心を減らす。

1915年（大正4年）

対華21カ条要求。日本、中華民国に権益増大の為に要求を突きつける。この結果、満州における権益は更に増したが、中国人の猛烈な反日感情に繋がってしまう。

1916年（大正5年）

袁世凱死去。北京の政府の求心力が弱まり、中国は各地に軍閥が割拠する混乱の時代に突入する。孫文等の革命勢力は中国南部より、北京政府の打倒と中華統一を目指す。

1917年（大正6年）

ロシア革命勃発。ロシアは革命による内戦状態になる。中国にも徐々に社会主義勢力が増える。

1918年（大正7年）

第一次世界大戦終結。中国内のドイツの権益は日本が引き継ぐ。

1919年（大正8年）

張作霖の奉天軍閥が満州をほぼ掌握する。張作霖はその後、

日本の後ろ盾を得て、北京政府への進出を狙うようになる。

同年 10月10日

孫文、中国革命党を改組し、上海にて中国国民党を結成。以降、中国国民党による中華統一を目指す。

1921年（大正10年）7月23日

毛沢東らにより中国共産党が結成。

1924年（大正13年）

第一次国共合作。孫文は中華統一の為に、共産党と手を結び、各地の軍閥を打倒する体制を整える。

1925年（大正14年）3月12日

孫文死去。政治的な活躍により力をつけた孫文は、北京に入り、平和の裡に統一を成し遂げようとしたが、その途中で北京にて客死。統一の機運は遠ざかる。

1926年（昭和元年）7月1日

孫文の死後、急速に力をつけた蒋介石が、孫文の跡を継いで軍閥・北京政府を打倒する北伐を行うことを宣言。北伐を開始する。

同年 12月

日本の支援を受けた張作霖が、ライバルの軍閥を軍事的に排除し、北京政府の陸海軍大元帥に就任。中華民国の国家元首であることを宣言。ここに蒋介石対張作霖の図式が成立するが、情勢は蒋介石の国民党軍に味方し、北伐は順調に進行した。

1927年（昭和2年）4月12日

上海クーデター勃発。蒋介石率いる国民党が、上海で突如中国共産党員を攻撃。これによって第一次国共合作は解消。

同年 5月

日本軍の山東出兵。日本陸軍が山東半島に出兵する。これは居留民保護が名目だったが、北京の張作霖を援護する意図で行われた。多少の軍事的な衝突もありつつ、張作霖の避けられぬ敗勢と、蒋介石との交渉により、一年後に日本は撤兵。大々的な軍事的衝突は回避される。

1928年（昭和3年）4月8日

北伐の再開。国民党内の権力闘争や、共産主義者の排除に成功した蒋介石が北伐を再開。国民党軍は順調に張作霖の軍を破り北京占領

を目指す。

同年 6月3日

張作霖の北京脱出。北伐に敗北した張作霖は、北京から本拠地奉天に脱出することを決意。深夜、特別列車にて北京を出立。

同年 6月4日

張作霖爆殺事件。奉天近郊の皇家屯にて、張作霖の乗った列車が爆破される。張作霖は同日内に死亡。その死は、息子張学良の帰満後に公表される。

同年 6月9日

国民党の北京占領。国民党軍が北京に入城。

同年 6月15日

蒋介石の国民政府(国民党の政権)が北伐の終了と中華統一を宣言。

同年 12月29日

張作霖の跡を継いだ張学良が、満州の旗を国民党の旗に換え、降伏したことを蒋介石の国民政府が認める。これにより満州は形式上、国民党の支配地域となり、中華統一は一応達成された。

1929年（昭和4年）3月～6月

蒋桂戦争。国民党内部の勢力争い。広西の軍閥と蒋介石との内戦。蒋介石が勝利する。

1929年（昭和4年）7月2日

田中義一内閣総辞職。満州某重大事件(張作霖爆殺事件)の後処理に関連して、田中義一内閣が総辞職する。

1931年（昭和6年）9月18日

満州事変勃発。関東軍参謀板垣征四郎・石原莞爾の謀略により柳条湖事件が起こり、関東軍が満州掌握を目指し軍事行動を開始する。関東軍は直接満蒙の領有を目指していたが、参謀本部の反対により傀儡政権の樹立へと方針を転換する。関東軍は翌年2月までに満州主要都市を占領する。

1932年（昭和7年）3月1日

満州国建国宣言。関東軍の後押しによって傀儡国家満州国の成立が宣言される。これにより関東軍による満州支配が確立され、以降、1945年8月まで、満州は事実上日本の完全な勢力圏となる。

用語解説

※作者流の解釈です

地名・都市名

満州（まんしゅう） 現在の中華人民共和国における東北部。元は満州族という民族が住む土地だったが、満州族の興した清王朝以降、中華の一部になる。地理的に、清・ロシア（ソ連）・日本の勢力圏が接していたため、この三国による争いの舞台になる。

奉天（ほうてん） 現在では中国の都市瀋陽。満州の経済・商業・交通における中心都市。日露戦争では、ここで大会戦が行われた。張作霖の軍閥は奉天を本拠にして満州を治めていた。

旅順（りょじゅん）・大連（だいにん） どちらも満州の遼東半島先端部（関東州）にある港湾都市。関東州は日本の租借地だったため大日本帝国の満州における拠点都市だった。1932年まで旅順には関東軍司令部が置かれていた。

ハルビン 満州北部の中心都市。ロシア帝国により、満州を横断する東清鉄道の建設が始まると、交通の要衝としてロシア人をはじめとする人口が増大した。その為、ロシア風の建築物が多い。またロシア革命後、革命を逃れた白系ロシア人の受け入れ先としてロシア人街が存在した。

北京（ぺきん） 中国の都市。清の都であったため、清朝滅亡後も中華民国の首都である時期も長かった。中華統一の為に重要な都市だった為、南の蒋介石と北の張作霖によって奪い合いが発生していた。後に中華人民共和国の首都になる。

上海（しゃんはい）・南京（なんきん） どちらも揚子江沿いにある中国の大都市。南京は蒋介石の国民政府の首都とされる。上海は列強の治外法権である租界が存在し、東洋一の国際都市だった。

国名

中華民国（ちゅうかみんこく） 1911年の辛亥革命の結果、清朝が滅んで成立した共和制国家。その内実は国民党・共産党・軍閥の割拠状態で、統一国家とは言えない時期も長い。

ソ連（それん） 正式にはソビエト社会主義共和国連邦。1917年のロシア革命でロシア帝国が滅び、内戦を経て1922年、ソビエト共産党のレーニンにより建国宣言がなされた世界初の社会主義国。その高い軍事力によって、満州の脅威になっていた。

中国内の勢力

奉天軍閥（ほうてんぐんばつ） 張作霖の勢力。奉天を

本拠とする軍閥。軍閥の割拠時代に頭角を現し、1919年には満州全体を支配する勢力となった。その過程で親日的な方針を取り、大日本帝国の後ろ盾を得て、勢力の伸長を図る。1926年には北京まで勢力圏に収めたが、1928年、蒋介石の北伐に敗れる。北京から逃れた張作霖は関東軍に殺害され、息子の張学良は蒋介石の国民政府に合流する。

中国国民党（ちゅうごくこくみんとう） 中国革命の父孫文が中華革命党を改組して作った、中華統一の為の政党。孫文の死後は蒋介石が台頭し、その跡を継ぐ。各地の軍閥を吸収したり、また協力を得て、北伐を敢行して中華統一を目指す。国民党は第二次世界大戦後、中国共産党に敗れ台湾に逃れる。

中国共産党（ちゅうごくきょうさんとう） 毛沢東らの作った社会主義政党。1927年に国民党と決裂し、独自の勢力を中国内に築いている。第二次世界大戦後、国共内戦に勝利して中華人民共和国を建国する。

その他の軍閥 1916年以降、中国は地方の軍がその支配地域を奪い合う状態が1928年まで続く。その勢力を軍閥と呼び、「軍閥時代」とも呼ばれる。軍閥同士の勢力争いと離合集散は中国の混乱に拍車をかけた。後に多くの軍閥は中華民国に吸収される。

日本軍に関する事柄

関東軍（かんとうぐん） 元は日露戦争の戦果である関東州（遼東半島の南部）及び南満州鉄道の付属地を守備するために編成された軍。日本の満州支配拡大の主人公。日本本国に対し、独立性があったため、現地の関東軍の独断専行が、大日本帝国を戦争に駆り立ててしまったという側面がある。

陸軍参謀本部（りくぐんさんぼうほんぶ） 陸軍の中心の機関。陸軍を統帥し、作戦計画、その指揮及び遂行を担った。勤務する軍人は陸軍きってのエリートだった。

陸軍大学校（りくぐんだいがっこう） 略称は陸大（りくだい）。陸軍内の教育機関。陸軍将校の中の秀才を集め、幹部を育成する為に存在した。将校（少尉以上の軍人）全体の一割ほどだけが入学を許された。徽章の形が似ていた為「天保銭（てんぼうせん）」と卒業者は俗称された。

陸軍幼年学校（りくぐんようねんがっこう） 陸軍将校を養成するための教育機関。13歳から14歳の男子が入学を許された。

二葉会（ふたばかい）・木曜会（もくようかい） どちらも若手の陸軍参謀によるグループ。時代の変化に合わせて陸軍

を改革するという目的を持っていた。

一夕会（いっせきかい） 二葉会・木曜会が合同したグループ。長州閥への対抗、総力戦体制の構築、満蒙問題の解決が会の目的とされていた。人事を掌握し、陸軍の中枢を会員が占めるようになるが、満州事変後意見の相違で分裂する。

中国の人名

張作霖（ちょうさくりん） 奉天軍閥の主。元は満州の馬賊の頭目であったが、やがて軍閥のリーダーに成長する。時流に乗って満州全体を支配する。日本の援護を受けて北京政府の代表にまで上り詰めるが国民党軍に敗れ、満州に逃げる途中で殺害される。

張学良（ちょうがくりょう） 張作霖の息子。張作霖の死後、奉天軍閥を引き継ぐ。蒋介石に降り、その下で軍司令官の地位を得る。後に西安事件を起こし、第二次国共合作を成立させる。

蒋介石（しょうかいせき） 孫文死後の国民党のリーダー。孫文の北伐を継承し、1928年張作霖を打倒し北京を占領。その後、張学良を従え中華統一を達成する。この時期から第二次世界大戦後まで、中華民国の元首として活躍するが、国共内戦に敗れ台湾に逃れる。

毛沢東（もうたくとう） 中国共産党のリーダー。1921年に中国共産党の結党に参加すると、1924年には幹部となる。第一次国共合作の解消と共に、国民党と内戦に突入。北伐の時期は地方の農村を拠点とする戦略で国民党に対抗していた。後に中華人民共和国初代主席となる。

日本の人名

河本大作（こうもとだいさく） 陸軍大佐。関東軍高級参謀。張作霖爆殺事件の首謀者として知られる。第二次世界大戦後、1949年、共産党軍の捕虜となり、尋問で事件への関与を自供。また戦前には、親しい人間に事件への関与を隠すことなく話していたと伝わる。

村岡長太郎（むらおかちょうたろう） 陸軍中將。関東軍司令官。張作霖爆殺事件の首謀者とも言われる。事件後、責任を取られ予備役に編入（引退）。翌年死去。

斎藤恒（さいとうひさし） 陸軍中將（事件時は少将）。関東軍参謀長。張作霖爆殺事件には無関係であったとされるが責任を取って翌年予備役に編入。

板垣征四郎（いたがきせいしろう） 陸軍大佐（後に大将）。関東軍高級参謀。石原莞爾と共に満州事変を決行した。二葉

会、一夕会に参加。事件後も陸軍の中枢の大幹部であった。

石原莞爾（いしわらかんじ） 陸軍大佐（後に中將）。関東軍高級参謀。満州事変の首謀者として知られる。軍事思想家としての側面もあり「世界最終戦争論」で知られる。順調に出世するが、後に東条英機と対立して予備役に編入される。

田中義一（たなかぎいち） 陸軍大将であったが、政党政治家に転身、政友会総裁となる。張作霖爆殺事件当時の内閣総理大臣であり、事件の処理で昭和天皇の不興をかって総辞職したとも言われる（諸説あり）。張作霖と個人的な親交があり、積極的に支援していた。

山縣有朋（やまがたありとも） 陸軍の創始者に近い人物。劇中では既に個人だが、彼が残した長州閥はまだ陸軍内で力を持っていた。

その他の事柄

シナ 現在における「中国」「中華」に該当する言葉。シナ人、シナ語、シナ料理のように用いられた。語源は「秦（しん）」と言われる。侮蔑的な表現であるという議論があり、現在ではあまり使用されない。劇中では時代の空気を表現するために敢えて使用している。

チャンコロ 中国人（漢民族）の俗語。蔑称としてのニュアンスが強い。当然現在は使用されないが、劇中では時代の空気を表現するために敢えて使用している。

阿片（あへん） ケシの実から精製される麻薬の一種。清の時代、イギリスがインド産のアヘンを中国に持ち込んだ。これにより清の銀が大量に流出する問題が発生。これを巡ってアヘン戦争が起こり、清が負けたことで、列強の中国進出が強まる。また、清は国内でアヘンを作ることでこれに対抗。銀の流出の対策にはなったが、よりアヘンを国内に蔓延させる原因となった。大陸進出した日本人もアヘンビジネスに大きく関り、特に関東軍はアヘンを独自の財源としていた。

阿片窟（あへんくつ） アヘンの密売と喫煙が行われる施設。中国では豪華なものから質素なものまで存在した。

満州某重大事件（まんしゅうぼうじゅうだいじけん） 張作霖爆殺事件の日本国内における呼称。民政党はこれを口実に激しく内閣を攻撃した。